

松山高吉の日本組合基督教会からの離脱 —— 海老名弾正との関係を中心に ——

洪 伊 杓

1. はじめに

1846年1月26日、越後国(新潟県)で生まれた松山高吉は、明治時代の代表的な日本の聖書翻訳者及び賛美歌事業の開拓者である。また彼は新島襄と共に日本組合教会と同志社の基礎を築いた一人である。海老名より10年先に生まれ活躍した日本最初のキリスト者であるので、松山高吉は多くの面で海老名を圧倒する存在であった。さらに、国学者出身である松山は、青年海老名の神道理解に少なからぬ影響を及ぼしたはずである。したがって、海老名で代表される明治におけるキリスト教の神道理解を究明するためには、必ず松山の宗教思想を分析する必要がある。同時に、海老名を含む日本組合教会の指導者たちが松山とどのような関係を結んでいたかを究明することで、海老名などの明治キリスト者の全体像をより明確にすることができるだろう。そのための作業として、本論考は、特に松山の日本組合基督教会からの離脱過程と海老名の関係に焦点を合わせて考察する。

2. 松山高吉と新島襄・海老名弾正との関係

(1) 新島襄との関係形成

1872(明治5)年、松山は平田派神道の立場からキリスト教の実態を探る反キリスト教的な目的で、神戸のD.C. グリーン(Daniel Crosby Greene, 1843-1913)の英学塾に潜入した。¹しかし問題点を見出せず、かえってグリーンの人柄に惹かれて信仰を得る。²1874年「摂津

*本論文は日本キリスト教団信濃町会からの研究助成による成果である。

¹ 同志社社史史料編集所編、『同志社百年史:通史編 1』、京都:同志社、1979、p.79.; 田中豊次郎、「邦訳聖書の恩人、松山高吉先生の事ども」、『基督教家庭新聞』、第31巻第1号、1938年1月号、日曜世界社、pp.12-13、34-35。

² この当時の状況について松山自身、次のように回顧している。「余は伝来儒教と平田派の国学で敲き込まれて居るいつたから、ドモ奇蹟や十字架や復活や其他わからぬ事が多い。然し嘗て思惟せしやうな邪悪な点は見出さない。それ許でなく感服すべき善き点が少くない。斯くて段々と研究の進むに随ひ、自然興味も加はり、頭も大分変つたや

第一公会」(現神戸教会)でグリーン宣教師などから洗礼を受け(当時 28 歳)³、その後彼は神戸教会の最初の牧師として就任(1880 年)した。⁴

2年後(1874年)6月に、グリーンと松山は横浜での『新約聖書』翻訳会議に参加していたが、その時、アメリカから帰国する新島の歓迎会があり、そこで松山は新島と初めて出会う。二人はすぐ「同志」になり、共に京都に帰って来てから本格的に同志社結成を行なった。⁵ その時「襄」という名は松山が字付け、⁶同志社で新島を君づけで話すのは松山だけだったというほど、二人の友情は厚かった。⁷

同志社もアメリカン・ボードの神戸宣教(神戸教会と神戸女学院など)にその発端があるため、1883年(明治16)に松山が同志社の社員(理事)に指名されたことは偶然ではない。⁸同年3月には「社則四ヶ条」を制定するが、松山もその起草者の一人であった。彼と同志社との関

うではあるが、信仰はまだ中々起りさうもなかつた。勿論信仰したくて耶蘇教を学びに来たのではない。憂国の心に駆られて耶蘇教の内容を探求せんとして来たのである。(田中豊次郎、「邦訳聖書の恩人、松山高吉先生の事ども」、『基督教家庭新聞』、第31巻第1号、1938年1月号、日曜世界社、pp.12-13、34-35.)

³ それは日本組合教会としては最初の組織教会である「神戸教会」での初代受洗者となる。このような点から溝口と林などは松山高吉を「日本のパウロ」と評価している。;「まさに日本の聖パウロとでも言うべき人物です」(林正樹、「松山高吉とその時代:日本の初期キリスト教宣教から」、『日本聖公会大阪教区報』、日本聖公会大阪教区教務局、第429号 2013年2月17日、1面);最近、「松山高吉」伝を世に出した溝口靖夫神戸女学院大学長は、次のようにいつている。「彼はキリストに逆らう者の中から選ばれて、福音の伝道者として召し出された日本人パウロであった。」(『松山高吉、野に咲いたパウロ、讃美歌作詞や聖書名訳』、『朝日新聞』、1971年10月30日、p.15.)

⁴ 創立以来グリーン、デビス、アッキンソンの三宣教師はいずれも仮牧師であったので、松山が1880年、初代牧師として迎えられたわけである。「神戸公会」は最初の「摂津第一神戸基督公会」の称を1886(明治19)年11月「神戸基督教会」と改めた。(溝口靖夫、「松山高吉におけるキリスト教と神道思想との接触」、『出会い:キリスト教と諸宗教』、第1巻第2号、1966年11月号、日本基督教協議会宗教研究会、p.32.)

⁵ 同志社大学人文科学研究所編、『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究:1869-1890』、現代史料出版、1999、p.279.

⁶ 「新島襄は在米中は日本名として「敬幹」(元服後の諱「いみな」)を名乗ったり、「約瑟」(ジョセフの漢字)を用いたりした。帰国するやに、新島は「ジョー」を漢字化して「讓」を使い始めたが、松山から「ゆずる」と読まれる恐れがあると注意され、「襄」に代えたという。(同志社山脈編集委員会編、『同志社山脈:113人のプロフィール』、同志社、晃洋書房、2002、p.34.);「新島 JOE に襄の字を当てはめたのは、(新島)先生の帰朝を横浜に迎へた松山先生であった。(浅野恵二、「松山高吉を記念する」、『同志社校友同窓会報』、第 94 号、1935 年.;河野仁昭、『追悼集 VI-同志社人物誌(昭和 10 年-12 年)』、同志社社史資料室、1993、p.2.から再引用.);『同志社 50 年史』、1930 年、p.14.;『教会時報』(聖公会)、1935 年 2 月 1 日.;大堰太郎、「聖書讃美歌の邦訳と同志社」、『我等の同志社』、同志社校友同窓会創立 60 周年記念誌、1935、p.62.; 溝口靖夫、『松山高吉』、西宮:松山高吉記念刊行会、1969、pp.96-97.

⁷ 「新島襄先生を『新島君』と呼んでしたしく話をした人は、蓋し、松山翁だけであろう。京都同志社を設立するについて(…)日本将来の教育を思う、二人の心と心はかたく結ばれたと往時を翁は語った。(溝口靖夫、「同志社人物(29)松山高吉」、『同志社時報』、第 33 号、1968 年 12 月号、p.38.;また松山が著した『旅日記』(原文)にも「新島氏」または「新島君」などの呼称が記されている。; 溝口靖夫、『松山高吉』、p.96.から再引用。)

⁸ 「創立以来、新島、山本の二人が主体になったが、その発展の過程でデーヴィスのアドバイスに基づいて、社員が5人になり、新島、山本覚馬、松山高吉、伊勢(横井)時雄、中村栄助になった。」「(『同志社50年史』、p.83.)

わりが深いことは明らかだ。⁹特に、これまで彼の同志社への隠れた貢献、同志社病院や京都看病婦学校の創設などがある。新島が神戸の松山を訪ねて同志社に医学校設立を訴えた結果、松山がその設立に尽力し、1887年(明治20)8月11日、開院及び開校式が行われた。¹⁰

それ以外にも松山は京都平安教会、洛陽教会の牧師、日本伝道会社社長としても努め、また神戸女学院、平安女学院で教えるなど、多彩な活躍をした。特に1890年に新島襄が召された時は、松山が葬儀の司会を担当し、その後同志社社長代理にもなったりしてその後の混乱期をよく指導した。¹¹このような二人の密接な関係を考えると、新島の教え子だった海老名弾正にとっては松山も新島のような恩師として考えたはずである。

(2) 海老名弾正との関係形成

松山は、新島及び同志社と直接的な関係を形成した一方、熊本バンドとは間接的關係にとどまったため、海老名弾正とも出会う機会が余りなかった。¹²松山と海老名が公式的に遭遇し直接対面したのは、1878年7月15日に開かれた最初の日本基督教信徒大親睦會である。¹³安中教会を設立した直後の青年牧師、海老名にはここで出会った松山に確かに大先輩としての貫禄を感じたはずである。¹⁴そしてその翌年(1879)には同志社を卒業し、安中教会で海老名の按手礼が行わるが、そこに新島と松山が直接参加し、松山は教会にむけ奨励の言葉を語った。¹⁵

二人の2回目の出会いは、1883(明治16)年5月に東京の築地新栄教会会堂で行われた日本基督教信徒大親睦會においてであったとされる。¹⁶この大会では新島とともに松山は、若いキリ

⁹ 松山の『旅日記』を見ると「同2月15日、新島氏、中村氏、伊勢氏と共に山本覚馬氏の宅に集り同志社社則を編纂す」と記されている。

¹⁰ 溝口靖夫、『松山高吉』、pp.98-101.

¹¹ 「松山高吉、野に咲いたパウロ、讚美歌作詞や聖書名訳」、『朝日新聞』、1971年10月30日、p.15.

¹² 松山と海老名はその出身地も新潟と福岡という遠距離で、年齢も10歳の差があったため、青年時期までは直接交流する可能性は低かった。特に海老名が改宗してキリスト者になる時も、松山は1874年から新約聖書翻訳のため横浜に移り、その2年後、海老名が熊本から京都(同志社入学)に来たため会うことはなかった。

¹³ この時、松山は祈りと司式を担当し、また「禁酒会」というタイトルの演説を行なった。海老名は「基督教は社会の精神」という演説で「基督教とはキリスト魂を所有する者のこと」と強調した。(「日本基督教信徒大親睦會」、『七一雑報』、1878年8月2日、1879年.;『植村正久と其の時代』第2巻、p.518-523.)

¹⁴ 以後1880年7月13日には大阪の梅花女学校でまた大懇親會が開かれたが、二人は再開出来なかった。松山はこの時期、神戸教会で働いていたので参加し、閉会祈祷まで担当したが、海老名は安中であり、植村も名古屋の出張であったので不参した。(「大阪に於て開かれし大親睦會」、『七一雑報』参照.;『植村正久と其の時代』第2巻、pp.523-526.)

¹⁵ 海老名弾正、「回想録」(第3巻)。;関岡一成、『海老名弾正:その生涯と思想』、p147. から再引用。

¹⁶ これはキリスト教リバイバルの頂点を画する大会で、参加の代議員は、新島襄(西京)、海老名弾正(安中)、金森通倫(岡山)、宮川経輝(大阪)、押川方義(仙台)、伊勢(横井)時雄(今治)、松山高吉(神戸)、植村正久(東京)、津田仙(東

スト者たちに模範になる存在だった。¹⁷新島という媒介が存在する限りは、松山と熊本バンドの青年たちは次の報道のように親密な信頼関係を結んでいった。

然し翁(松山)は専ら当時の青年教職であつた海老名弾正、小崎弘道、植村正久諸氏と交はることを喜びとし、年齢は此らの諸氏とは十年を隔ててゐるに拘はらず、最も親密に往来した。¹⁸



(写真) : 1883(明治16)年5月に東京で行われた日本基督教徒大親睦会

京)、奥野昌綱(東京)、小崎弘道(東京)、井深梶之助(東京)、内村鑑三(札幌)、など32名で、錚錚たる人物を網羅していた。(同志社社史史料編集所編、『同志社百年史:通史編 1』、京都:同志社、1979、p.278.)

¹⁷ 5月 10日行われた講演会で松山は「爾は誰ぞ」という題目で、植村は「キリスト教と文学」、横井時雄は「荏弱者の勝利」、宮川は「日本基督教の前述」という題目の講演を行なった。5月11日の聖餐礼式も司式は奥野が、説教は新島襄が担当するなど、日本組合基督教会の熊本バンドグループが力強い指導力を発揮した。5月16日に横浜海岸教会で行われた夕方講演会では、伊勢、押川、松山が壇上に立ったし、5月18-19日の両日間行われた「大説教会」の行事の時も松山は「悔改の説」という説教を行った。その他にも小崎、宮川、押川、金森などが説教を続いた。(「明治16年東京に於ける全国基督教信徒大親睦會の状況」、『七一雑報』と海老名弾正の談などを参照。;『植村正久と其の時代』第2巻、p.567-569.)

¹⁸ 「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.

新島を媒介として、松山は小崎弘道や海老名など熊本バンドの青年たちと親密になった。¹⁹ 特に海老名については、自分が働いていた神戸教会の有力者の娘を紹介するほどであった。また後任の牧師としても積極的に推薦したが、海老名の安中教会の仕事のため結局決裂してしまった。²⁰そして、松山は1890年4月2日に「日本組合基督教会伝道会社」の社長に選出されたが、わざわざ海老名にその職を渡そうと努力したのである。その結果、松山は9月に社長職を辞任し、平安教会の名誉牧師となった後、10月に海老名が新社長になる。²¹松山の逝去を報道した1935年の『福音新報』はその時の事情を次のように述べている。

聖書翻訳の事業が一段落したので翁(松山)は明治二十三年(1890)京都に赴いて平安組合教会の牧師となつた。而して日本組合教会伝道会社の創立と同時に其の社長に選ばれたが翁は就任せずさらに選ばれた海老名弾正氏に由つて始めて事業は遂行せられた。牧師在職六年、其平生の素志であつた同志社に入つて其の教授となつた。²²

松山は1890年6月4日、海老名に「伝道会社の正員社友の募集に尽力することを願う」内容の書簡を送っていることから、海老名への期待心を確認できる。²³

3. 松山の日本組合基督教会からの離脱過程と海老名

(1) 日本組合基督教会と熊本バンド

日本組合教会と同志社は、宣教師と親しい阪神(神戸、三田)バンドと、宣教師と一定の距離を置いた熊本バンドが互いに異なる地域的な背景を持ったまま結合した共同体であった。

¹⁹ 「翁(松山)は小崎弘道氏とは霊南坂で隣同志の仲であつた。明治二十年霊南阪教会の献堂に当つて翁が詠じた讚美歌が、作者‘Takayoshi Matsuyama’とある第四十二番である。これは其の譜も與つて力あるであらうけれども日本の老幼男女に最も愛誦せられた句で、又多くの人を救に導いたものである。記憶に誤りがなければ郡是製糸会社の創立者故波多野鶴吉氏が放蕩に身を持崩した極、自殺を決心して頸垂れつつ歩む耳を捕へて教会へ導いたのも此の讚美歌であつたと聞いてゐる。日本語を以ての原作であるだけに我らの情緒を揺がす何ものかが伏在する。因に後に委員に由つて多少の補筆は行はれたが現行四百二番、同四百三番も亦氏の作である。」(「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.)

²⁰ 「海老名弾正氏とは翁(松山)が神戸教会の後任にと私かに思ひ定めて、同教会の有力者某氏の令嬢を(海老名)氏に世話して、忌應なしに就任せしめやうと謀つたほどの仲であつたが、海老名氏は当時上州安中に活躍中で、到底其の責任を免れて神戸へ下ることは出来なかつた。『それに其の令嬢と言ふのも余りどつとしなかつたのでね』と海老名先生は笑つた。」(「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.)

²¹ 日本基督傳道會社編、『日本基督傳道會社略史』、大阪：日本基督傳道會社、1898、p.12.；関岡一成、『海老名弾正』、p.181.

²² 「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.

²³ 松山高吉、「海老名弾正宛書簡」、1890年6月4日。；『海老名弾正資料目録』、同志社大学人文科学研究所、2004年、p.69.

²⁴松山は新島と宣教師をつなげ多くのアドバイスを提供した。²⁵一方、阪神バンドの松山と熊本バンドを同じ場所に集めた人物は新島だった。従って、宣教師との関係に配慮し組合教会及び同志社の問題を扱って来た松山は、熊本バンドと根本的な違いがあったのだろう。松山と熊本バンドとは新島という存在を介した間接的關係に留まるほかない限界があった。そのような意味で、新島の死は二つのグループの「割れ目」を意味した。

1890年は、教育勅語の頒布と同時に国粹主義的な風土が拡散し、また同志社の創設者である新島が召された年である。その時から同志社は内外的な困難に遭った。外的には反キリスト教的教育政策による外部的圧力に直面し、内的には新島の不在によって外国人宣教師と円満な連絡やコミュニケーションが不可能となり、結局葛藤が生じることとなった。すでに1887年の一致教会と組合教会との教会合同議論の時から組合教会の中心勢力(代表者7人中で5人)²⁶として浮び上がっていた熊本バンドは、この時点で、教会政治の全面に登場しアメリカン・ボードからの独立を主導した。したがって、1890年は新島襄と共に同志社の創設者たちが徐々に歴史の表舞台から退陣し始めた年でもある。1月23日、新島が死ぬと松山が2月3日から平安教会を兼ねて同志社教会の臨時牧師になり、同時に日本基督教伝道会社の社長に選出されたが、²⁷松山は数ヶ月後、その職を直ちに海老名に譲った。²⁸最初は若い熊本バンドに対する信頼と期待で、能動的な世代交代につながったのである。²⁹

同時に、同志社英学校も金森が一時的に臨時社長職を遂行したが、3月に熊本出身である小崎弘道が校長に就任して世代交代が成り立った。同志社の臨時社長(総長)は新島の義兄(八重の兄)であり、同志社の学校名をつけた創設者の一人である山本覚馬であったが³⁰、山本も1892年に逝去し、小崎が社長職も継承して第2代社長になった。その翌年には同志社教会の牧師も小崎が担当し、日本組合基督教会は海老名と小崎の熊本体制として新たに構築された。1892年に発表された新島の後任や同志社の総長などの候補に対する交友会員の推薦集

²⁴ 杉井六郎、「アメリカン・ボードと同志社」、『同志社時報』第33号、1968、pp.11-12.; 溝口靖夫、『松山高吉』、西宮:松山高吉記念刊行会、1969、p.93.

²⁵ 例えば、同志社が相国寺の横に建てられる時、現地の神官僧侶たちが反対運動を展開した時にも国学者出身として問題解決の相談役になった。(『同志社50年史』、p.55.; 溝口靖夫、『松山高吉』、p.96.)

²⁶ 1887年(明治20)の合同教会憲法起草委員として宮川経輝、伊勢時雄(横井時雄)、金森通倫、松山高吉、小崎弘道、海老名弾正、湯浅治郎の7人が選定されたが、ここで松山以外のほとんどの人物は皆熊本バンドであり、安中出身の湯浅も海老名と密接な関係であったからだ。(『植村正久と其の時代』第3巻、p.670.)

²⁷ 松山が著した『旅日記』には「社長疾病に付或は故障等起る事あらしんとて其代理者となるべき者を選ばんとし、常委員会常置議長を立て之に当らしむる事に定め遂に余に此任を負はしむ」と記されている。(溝口靖夫、『松山高吉』、p.105.)

²⁸ 日本基督傳道會社編、『日本基督傳道會社略史』、大阪:日本基督傳道會社、1898、p.12.: 関岡一成、『海老名弾正』、p.181.

²⁹ 同志社社員(理事)の定員も2名が増加し、計8名になった。松山を含め山本覚馬、中村栄助、大沢善助、湯浅治郎、横井時雄、宮川経輝、小崎弘道であったが、横井、宮川、小崎は熊本バンド出身であった。

³⁰ 『日本近現代人名辞典』、p.1114.

計表を見ても、松山高吉の周辺に海老名弾正など熊本グループが並んで名前をあげられている。³¹同志社教会でも小崎が就任したが、彼が忙しい場合は、ほとんど海老名などの熊本グループが代わりに説教を担当した。³²その結果、1893年4月2日に開催された組合教会総会(京都)では、一致教会(日基)との合同問題が不成立となり、その翌年勃発した日清戦争では義戦論が登場するなど、いわゆる、日本組合教会での熊本バンドの時代が本格的に開かれた。

溝口はその時期の熊本バンドの浮上について、「大体34、35歳で、彼等にとって宣教師の中に恩師もあることでもあり、これに対して主体性又は独立尊重の線が強く出たことは自然の勢いであったと見られる」³³と評価したが、新島の死の直後訪れた急な変化あるいは衝撃でもあった。

(2) 海老名の伝道会社社長の赴任と内部葛藤の始まり

海老名は、このような中で松山の配慮により1890年10月に日本伝道会社の社長に就任した。彼は北海道など全国各地を歩き回って旺盛に活動したが、当時の状況について次のように述べている。

伝道会社社長時代は小生に取って実に東奔西走に活動致し、資金の募集、人物の配置、交代、伝道地の興廢、経済の独立等、実に内外人の反対等、鍛錬の時代にて候。³⁴

ここで注目するのは、「経済の独立」と「内外人の反対」という点だ。海老名は若い年で日本組合基督教会を指揮することになり、結局アメリカン・ボードの宣教師への配慮が欠けてしまったようだ。この時期から日本人教職とアメリカン・ボードの宣教師の間に対立が表面化したからだ。海老名のこの時期に関する回顧である。

³¹ 同志社社史史料編集所編、『同志社百年史:通史編 1』、p.633.

³² 1892年の同志社教会での説教も4月24日に海老名が「義人は信仰によりて生くべし」という題目で熱弁を吐いたし、その次の主日である5月8日には松山が「ヤコブの神を己が助けとし、その望をおのが神エホバにおく者辛いなり」という題目の説教を行うなど近くの距離に泊まった。1892年の日曜日礼拝説教者を分布を見ると、小崎弘道(23回)、柏木義円(1回)、湯浅治郎(1回)、浮田和民(1回)、松山高吉(3回)、海老名弾正(1回)、横井時雄(1回)など、主任牧師である小崎を除けば、松山が最も多い説教を行ったが、名簿にもよく現れているように、熊本バンドの青年リーダーたちに取り囲まれている形である。このような現象は1893年も同様であった。天皇制国家主義の圧力が学校により激しく迫ってきた1894年には、小崎牧師が教会と学校業務に忙しく説教が不可能な場合、海老名、宮川、古木、長田時行など熊本バンドに説教を任せることがより頻繁になった。(加藤延雄、久永省一、『新島襄と同志社教会』、同朋舎出版事業部、1986、p.120、122、125、129、138.)

³³ 溝口靖夫、『松山高吉』、p.107.

³⁴ 渡瀬常吉、『海老名弾正先生伝』、龍吟社、1913年、p.207.

組合派の内憂外患は明治23年（1890）の頃より32 - 33年にかけて、10年間ほど^{はげ}烈しき時期はなかったのである。当時我は独立運動の巨魁と見られ痛く宣教師^{ならび}に宣教師派に疎まれた。我は23年（1890）に組合教会伝道会社々長に推選せられ東走西駆、（…）休息の時期もなかったが、この時攻撃の焼点となった。当時組合派には先輩後輩の二流があつて、後輩は力を極めて先輩攻撃をやった。独立問題は先輩の主張した所であったから、後輩の一派は之に反対した。先輩は自然と宣教師に結び付き、先輩の行動を検束しやうとした。³⁵

ここで宣教師側に立って、海老名など熊本バンドの「後輩」たちを攻撃したいいわゆる「先輩」の中には松山も含まれていたはずである。このように、1890年の新島死後から熊本バンドの指導力は大きな転換点を迎え、宣教師たちはもちろん、彼らを信頼していた松山も大きな衝撃を受けたと考えられる。

1893年9月、海老名は宣教師からの経済的、神学的独立などを主張した結果、伝道会社社長職の再選に挑戦したが落選する。しかし、彼は直後に日本組合基督教会の母教会である神戸教会に赴任する。この教会は他でもない松山が初めて開拓し、主任牧師として務めた教会だったが、海老名はここで5年間（1897年まで）働き、日清戦争（1894 - 5）を支持する「義戦論」を展開するなど国粹主義、自由主義神学を高揚させて行った。特に、海老名が在職していた1894年（明治27）に神戸教会で開かれた組合教会の総会では、日清戦争の中で盛り上がるナショナリズムの高揚で、宣教師から独立しようとする議論がより盛んになり、翌年（1895）のアメリカン・ボードからの寄付金拒絶の決議案が示された。

（3）宣教師との決別と財産管理上の問題

海老名が神戸教会を担当していた1895年（明治28）にはアメリカン・ボードから特派使節四名が同志社を訪問し、同志社社員と数回交渉を重ねた。その結果、次の三点に議論が集中した。³⁶

- 一、京都にある宣教師館、明治八、九年来同志社教師として招聘された**外国宣教師の住宅として新島の個人名義に所有登記されている土地家屋の使用権の問題。**
- 二、同志社の不易の綱領中に掲げられた「**基督教**」とは、如何なる**信仰を基礎とするかの問題。**

³⁵ 海老名弾正、「伝道三十年」、『新人』、第15巻第7号、p.99.

³⁶ 『同志社90年小史』、p.77.; 溝口靖夫、『松山高吉』、p.107.

三、同志社病院、および京都看病婦学校の管理権問題。

特に、第三の同志社病院と看病婦学校の問題は、この設立に松山も最初から発起人の一人として尽力したという点である。1893年(明治26)10月、病院長のベリーが帰国したが、留守中に宣教師の財産管理問題が起きた。遂に、病院常議員の日本人は「将来ベリー博士の病院長としての前地位を保たしむべからず。宜しく日本人を以て此地位に据え、ベリー氏をして顧問たらしむべし」との議を決した。³⁷討議が続いていたが、社員側は原則的な立場だったので、宣教師側は不安を感じ、実際の所有権と伝統を強調する立場を固執した。その結果、意見は平行線のまま妥結に至らず、遂に1896年(明治29)8月21日、ボード派遣の宣教師は全員同志社と関係を断ち、引き上げることとなり、今出川通りアルブレヒト(G. E. Albrecht)邸に「福音学館」を開設、ここを本拠に神学生教育を継続することとした。³⁸

この時期における松山の意見は『旅日記』から読み取ることができるが、「明治 27 年(1894)4 月同志社社員会ニ出セル同志社意見十条」に明らかである。松山とベリーとの関係は明治の初年から兄の耕造を通して深められ、病院及び看病婦学校の問題が起こったことは堪えがたいものであった。結局 1895 年、日本組合基督教会第 10 回総会では日本基督教伝道会社に対するアメリカン・ボードの指定寄付金廃止が公式決定された。³⁹特にこの間、松山は以前から同志社資産管理委員となっていたこともあり、ベリーの留守中にこのことに至ったのは最大の責任を感じざるを得ない立場にあった。⁴⁰

松山による1902年の日記によると、病院及び看病婦学校に関する議論はこの時期まで続いている。松山は平安女学院で講義しながらデーヴィス宣教師宅などで数回にわたってこの問題について相談している。

「午後七時デビス氏宅ニテ同志社病院常置委員ヲ開ク」 (松山高吉『日記』1902年4月18日、土)

「同志社病院、看病婦学校ノ件ニ付平瀬与一郎氏ヲ訪フ」 (松山高吉『日記』1902年5月14日、木)

「午前會堂、礼拝後 田川氏ノ件ニ委員會、午後看病婦学校ノ件ニ付 中村栄介氏ヲ訪フ」 (松山高吉『日記』1902年5月17日、日)

「同志社病院ノ件ニ付「談」、委員會ヲ午後三時ヨリデビス氏宅ニ開ク 田村氏デビス

³⁷ 『同志社50年史』、pp.107-112.

³⁸ 溝口靖夫、『松山高吉』、p.107-108.

³⁹ 『日本基督教伝道会社略史』、p.17.; 土肥昭夫、『日本プロテスタント・キリスト教史』、新教出版社、1997、p.146.

⁴⁰ Otis Cary, "Mission of the American Board" in Tokyo Missionary Conference, 1900, p.913.; 溝口靖夫、『松山高吉』、p.108.

氏余并ニ大塚氏」（松山高吉『日記』1902年10月14日、水）

しかしこのような努力にもかかわらず、同志社病院と京都看病婦学校は同志社としては経営を放棄することとなり、後は熊本出身者としてその学校の教授であった佐伯理一郎が継承し、個人病院⁴¹になってしまった。

このように、熊本バンドが組合教会と同志社の新しいリーダーシップとして急浮上した後、拡散した国粹主義の風潮と教会の独立を標榜した反宣教師的な流れに、松山は懐疑を感じたように見える。1897年に小崎が同志社社長を辞任した後も、同様に熊本バンドの横井時雄が同志社社長に就任し、1899年及び日露戦争が勃発した1904にも熊本洋学校出身の下村孝太郎が社長に就任、1906年にも熊本出身の原田助が社長になる。このように同志社内部は熊本バンドが持続的なリーダーシップを発揮して行くことになり、それが強化されるほど松山は居心地が悪くなった。

適ま翁(松山)に取つては容易ならぬ問題が突発した。(…)時の同志社総長小崎弘道氏の下にあつて、教会の自由独立問題勃興し、小崎、横井、海老名、宮川諸氏は何れも之を強調して一時外国宣教師は同志社から退去するの余儀なきに至つた。翁の眼には此れは日本固有の道德を破壊する不埒千萬の行動と映つた。しそう上、實際上、其の恩師にして先進たり、長老たる宣教師に弓を引くには、翁の眼には忘恩不徳の所為であつた。

42

このように海老名など熊本バンドが組合教会の中心勢力になるやいなや、このような葛藤が生じたのである。彼らの急進的な教会独立の運動は、彼らを信頼し、期待していた松山に衝撃を与えた。上の記事にその時の松山の様子がよく表れている。これは松山の日本組合基督教会の脱退と日本聖公会への転会に重要な影響を及ぼした。特に松山がその設立と運営を主導した同志社病院と京都看病婦学校の管理問題は決定的な理由だっただろう。

(4) 新神学受容とその急進性への警戒と失望

1880年から86年まで松山が神戸教会を中心に行なった説教が記されている『聖書講義並演説』を見ると、松山の基本的な神学思想を把握できる。1883年1月7日の「贖罪」という説

⁴¹ 京都産院(その後、佐伯病院)と産婆看護婦学校に改名した後、現在は佐伯医院ウィメンズクリニックとして存続している。

⁴² 「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.

教には「其造り主ナル神ヲ忘レ、其身神ノ創造シ給ル萬物ノ中ニ在テ（…）イエス人間ニ在リテ真愛ヲ顕シ、人心ヲシテ相合ハシメ、又身贖罪ノ功ヲ成シテ神ト人トノ間ヲ和セシメタリ」⁴³と述べ、伝統的なキリスト論に基づいた「贖罪愛」を強調している。⁴⁴このように「神の受肉」と「イエス・キリストの十字架上の苦難」、そして「復活」と「三位一体論」などの基本的、伝統的なキリスト教の教理を強調する松山の観点は次の植村の立場と類似する。

「ナザレのキリストを誰とかなす。人にして人にあらず。彼は肉体に現われたる神の言なり。我これに就きて生命を得たるを知る。我これに接してその活気の旺なるを感ずるを得たり。イエスキリストは吾人の救者にあらずや。これらの数点はキリスト教の根底要理なり。」⁴⁵

後日、植村は海老名などの新神学について「敬虔の心厚からざる理性によりて、会釈もなく靈魂の真理及びその事実を論ぜんと試みる」⁴⁶と批判したが、松山も植村同様に新神学に疑問を抱き、「聖霊の働き」による真理への到達を強調した。松山も植村同様「知識の本」という説教の中で、「真神ヲ敬畏スルハ知識ノ本ナリ」（1881、1885）⁴⁷とし、人間の理性のみでは真の知恵に至らず、神への敬虔により真理に到達できると考えた。

しかし、このような松山の神学的立場は、新島が召された1890年以後から内外の威嚇に直面する。すなわち、日本の世論はキリスト教を外來宗教として排斥し、日本のキリスト教がどのくらい忠君愛国を標榜しても、欧米の宣教会に依存している限りは伝道活動において危機感が蔓延するだけだった。そこで、組合教会は積極的に新神学を取り入れた。⁴⁸日本教会の独立問題とともにキリスト教神学の理解に対する新しい動向は、組合教会内部の新進リーダーたちと宣教師の間に対立と不信感を強めた。

熊本バンドは、1895年の第10回総会で自給独立のための一致と結束を強調したが、それを実践するためには明確な信仰告白あるいは宣言が必要であると判断した。その結果、同年（1895）に奈良で開かれた「日本組合基督教会教役者大会」で海老名が起草した「奈良大会宣

⁴³ 松山高吉、「贖罪」、『聖書講義並演説』、1883年1月7日の説教中。

⁴⁴ 松山の説教に現れた神学思想については、洪伊杓、「説教から見た松山高吉の神学思想—『聖書講義並演説』（1880-1886）を中心に」、明治学院大学キリスト教研究所研究会、2018年3月6日、参照。

⁴⁵ 植村正久、「神學上の波瀾」、1890年5月23日、著作集4、p. 265. ;土肥昭夫、『日本プロテスタントキリスト教史』、新教出版社、p. 182.

⁴⁶ 植村正久、「神學は神聖なる科學なり」、1892年12月2日、著作集4、p. 218.

⁴⁷ 松山高吉、「知識ノ本」（箴言1:7、1881年8月28日、神戸會堂）；「知識ノ本ハ神ヲ畏ルハニ在リ」（箴言1:7、1885年8月13日、麻布會堂）

⁴⁸ 上同

言」が出された。⁴⁹その宣言は既存の(組合教会の)「信仰の告白」が新神学に対する否定的な姿勢を脱皮し、新神学の影響から自由主義的な立場に傾倒した人々も受け入れる内容を持っていた。すなわち、既存の福音主義的な立場と距離がある人も受け入れられる内容として作成された。⁵⁰次の記事を見ると、松山は反宣教師的な教会の独立問題についても不満をもっていたが、このような新神学の積極的な受容の雰囲気にも失望し、それは結局日本組合教会からの脱退という決心につながったことが確認できる。

翁(松山)に取つては容易ならない問題が突発した。それはしそう上に於ては、横井時雄、金森通倫、其の他の諸氏が新神学を唱道して、(…)翁は遂に久しく交はつた組合教会の同人と相容れず、去つて平安女学院の教授となり、次いで其の籍をも聖公会に移すこととなつた。⁵¹

「奈良宣言」はその後、海老名と植村正久との「キリスト論論争」(1901-1902)に自然につながる触発点ということから、松山の植村に対する態度と認識は松山と海老名の関係を理解するためにも重要である。すなわち、松山は横浜での『舊約聖書』の翻訳作業(1884)⁵²と『新選讚美歌』の編纂作業(1886)⁵³で、すでに植村と共に協力し、互いに深い尊敬心を持っていた。同時に、松山は基本的に宣教師に対して友好的だったため神学的にも植村とも多くの面で共鳴していたと考えられる。松山は植村が1884年にキリスト教弁証書として『真理一斑』⁵⁴を出版した時も書評を掲載し、また「植村君については回顧も深い。(…)私は君のま

⁴⁹ 土肥昭夫、『日本プロテスタント・キリスト教史』、p.147.

⁵⁰ 川上純平、「(2)アメリカン・ボードの日本伝道から現代まで」、『日本の会衆派教会(組合教会)の歴史—その源流と発展』、2009年11月9日、参照。

⁵¹ 「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.

⁵² 「聖書事業の完成については(…)奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎諸氏の有力なる補佐に負うところすこぶる大なるべからざることなり。(…)旧約全書の翻訳計画せられ、(…)邦人にては植村正久氏及び松山高吉、高橋五郎の両氏も引き継ぎ尽力せられたり。」(植村正久、「日本語聖書の由来」、『福音新報』第1088号、1916年5月4日。;『植村正久著作集』3、新教出版社、1966、pp.371-372.);『植村正久と其の時代』第1巻、p.210.;『植村正久と其の時代』第3巻、巻頭言。;「舊約聖書翻譯完成祝賀會」、『植村正久と其の時代』第4巻、p.112.;聖書翻譯委員であったフルベッキも宣教師も「1884年(明治17)、松山高吉、井深梶之助、植村正久の三氏なりとす然るに右三氏は其他に種々大切なる事務を擔當した」と語った。(「フルベッキも氏演説」、『基督教新聞』、1888年2月、『植村正久と其の時代』第4巻、p.116。再引用。);「別所梅之助より編者へ」、『植村正久と其の時代』第4巻、p.168。;また『舊約聖書翻譯事務委員會記録』には、松山、井深、植村3人がどのような過程を経て翻譯作業を行なったのかが詳しく記録されている。(『植村正久と其の時代』第4巻、pp.192-204。279.)

⁵³ 「植村松山氏等と共に新選讚美歌の爲のに盡力せられたることあり。」(『福音新報』、1891年10月9日、第29-30号、『植村正久と其の時代』第4巻、p.152、186、400。);『新選讚美歌』の序文には「編輯ニ従事セシハ松山高吉、奥野昌綱、植村正久ノ三氏ナリ」と明示されている。(同志社大学人文科学研究所編、『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究:1869-1890』、現代史料出版、1999、p.178.)

⁵⁴ 『真理一斑』に関しては、次の論文を参考。;芦名定道、「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、『アジア・キリスト

だ若輩の頃から甚く感腹していた者である」⁵⁵、「植村君は福音と、特に伝道の為に全く召された人物であった」⁵⁶と称賛するなど、「植村正久と読書」という回顧談では彼の集中力と学識、説教者としての人柄を高く評価した。⁵⁷1931年に田中豊次郎と日高善一などが松山を訪ねて故植村に関する回顧談を求めた時も、松山は「羽織袴に威儀を正して正座され」た後、「植村先生は私の尊敬措く能はざる方で御座いまして、此の先生の功績の多い聖書翻訳のことやら、伝道のこと等申上げるには斯う致しませんと私の心持が許しませんのです」⁵⁸ 答えたように植村への尊敬の念を表した。

このように松山と植村との信頼関係⁵⁹は宣教師を含む横浜バンドとの親密さを意味し、海老名と植村の神学論争にみられるように、松山が熊本バンドの新神学受容に簡単に影響されることのなかった多面的な存在だった。このような松山の広範囲な人間関係は、彼が組合教会を離脱することになった重要な原因の一つになっただろう。同時にそれは、彼が組合教会に残した精神的遺産が、彼の意図とかかわらず歪曲されていく一つの出発点でもあった。

4. 松山の聖公会への転会と理由

(1) 組合教会から聖公会へ

松山が聖公会に転会する直前の1896年初、1月10-11日に同志社教会で「大説教会」が開かれたが、10日夜の集会は海老名が担当した。それほど同志社での海老名の地位が高くなったのだ。また、週に1回ずつ同志社祈祷会が開催されたが、松山は2月7日に「伝道会社のため」というメッセージを伝えた。⁶⁰海老名の日本伝道会社社長就任後に生じた様々な失望や憂慮があったのかもしれない。同年の4月初には、小崎宅で同志社評議員会が開かれ小崎の留守中の説教者として原田助、海老名、森田久万人、湯浅治郎など確定され、その間しばしば代理説教者として活躍した松山は姿を消し熊本バンドの人物が中心に構成された。

同年(1896)6月に、松山は同志社での教職をすべて辞任すると同時に平安女学院に移り、倫理と国史を教え始めた。7月12日には同志社教会から洛陽教会に転籍し同志社との関係を

教・多元性』、現代キリスト教思想研究会、第5号、2007年3月、pp.1-22.

⁵⁵ 松山高吉、「回顧餘談」、『基督教家庭新聞』、第20巻第9号、『植村正久と其の時代』第4巻、p.183-184.

⁵⁶ 松山高吉、「植村正久と舊約全書翻譯」、『植村正久全集』、月報、第5号、『植村正久と其の時代』第4巻、p.184-185.

⁵⁷ 松山高吉、「植村正久と読書」、『基督教家庭新聞』、第20巻第9号、『植村正久と其の時代』第5巻、p.469.

⁵⁸ 田中豊次郎、「邦訳聖書の恩人、松山高吉先生の事ども」、『基督教家庭新聞』、第31巻第1号、1938年1月号、日曜世界社、p.35.

⁵⁹ 洪伊杓、「松山高吉と植村正久ノ関係形成過程とその意味」、『キリスト教史学』第69集、2015年7月、pp. 178-196. 参照。

⁶⁰ 加藤延雄、久永省一、『新島襄と同志社教会』、p.145.

整理する。このような過程の中で松山は熊本バンドと距離を置き、結局翌年(1897)1月29日には、平安女学院講堂でマキム監督から堅信礼按手式を受けて組合教会を去り、聖公会に転会する。組合教会の会員と牧師の資格を自ら捨てた松山は、翌年(1898)3月に同志社資産管理委員を辞任、12月28日には同志社社員(理事)を辞職することで熊本バンドとの関係を明確にした。特に深く関わった同志社病院と看病婦学校の閉鎖が行われた1900年前後には、松山のそのような決断をより強化させた。⁶¹

(2) 聖公会に転会した理由

ここで、松山はなぜ組合教会以外にもプロテスタントの教派があるにも関わらず、聖公会を選択したのだろうか。これについてはいくつかの推測が可能である。第一に、松山の新宣教師的な姿勢である。この点は反宣教師的な立場から自給自立を強調した海老名の姿勢と対比される。宣教師の貢献と権利に反発した熊本バンドの政治的な動きに反動した松山は、宣教師(司祭)を中心に運営される聖公会に魅力を感じた可能性が高い。⁶²一つの事例として、旧約聖書翻訳の作業を行なった時、フルベッキ宣教師の代わりに聖書翻訳委員として参加することになった聖公会のファイソン宅で会議が行われた際、植村は意見対立のため一切来なかったが、松山は真面目に協力したことからも聖公会の宣教師を尊重している様子が窺える。

⁶³

第二に、松山の薄い教派意識やエキュメニズムである。この点は、彼が横浜でグリーン宣教師とともに設立した「真理學講義所」を長老派宣教師に任せて現在の横浜指路教会となった経緯⁶⁴、そして植村との協力関係から組合教会と一致教会の合同を推進したことからも確

⁶¹ 溝口靖夫、『松山高吉』、p.108.

⁶² 1884年秋以後、東京に移ってから説教(講演)した場所を見ると、彼が欧米の宣教師と親しい関係を結び、宣教師宅で説教を頻繁に行なっている。例えば、ホイットニー氏宅、イーストレキ宅、ホールズ氏病院、イーストレキ氏の宅などを挙げられる。

⁶³ 「明治17年頃の事であった。全国諸教會から舊訳全書の翻訳委員を擧げてその事業を進めることになった。(…)私(松山氏)は神戸教會を辭して上京することになった。委員はフルベッキ、井深梶之助、植村正久三氏に私に加はったのであった。(…)植村君は(…)一番町教會の建設の素地が其の頃出来かかっていた頃であらう、(…)イザヤ書の場合は、聖公會のファイソンと云ふ宣教師が加はったがフルベッキ氏が歸國したので、其の主義が違つてみると云ふ點からでもあらうが、ファイソンの宅には植村君は決して來ない。ファイソンと云ふ男が餘程氣に食はなかつたやうである。それでも原稿だけは時々届けて來た。其の他の部分は不完全なものが既に存在してゐたので、それを訂正して出來たものもあるし、私の下宿に集つてやつたものもある。私が一人でやつた所も多いのであった。(植村全集、月報・第五号)」；松山高吉、「植村正久氏と舊訳全書翻訳」、『植村正久と其の時代』第4巻、pp.184-185.

⁶⁴ 「組合派のグリーン氏が松山高吉氏と共に聖書翻譯事業の爲めに横濱に來て居らるる頃、太田町に「真理學講義所」といふ看板を掲げて集会して居た。グリーン氏は、指路教會のルミス氏の夫人と兄弟の関係もあり、外に都合もあったので、遂ひに長老教會の集会と組合派のものを一つにして、今日の指路教會を形造るに至つた。」「(教會合同)、『植村正久と其の時代』第三巻、六五四頁。)

認できる。⁶⁵神戸教会を辞任し、東京に移った1884年秋からは、組合教会以外の長老派教会やメソジスト教会など幅広く交流しながら説教を行なった点からもわかる。⁶⁶組合教会から聖公会に転会した後、1902年にも「故アレキサンドル氏…捧呈式に招カレ室町丸た町上ルー致教會にユク、幼稚園ニテ…郷食アリ」⁶⁷と、京都の一致教会との交流を継続していることから確認出来る。この点について、現代的な意味のエキュメニズムを彼が積極的に意識したわけではない。しかし、彼は日本の初代キリスト者として教派主義に陥るのではなく、福音の純粋さを基本的に尊重しようとする中で自然にいわゆる「エキュメニカル精神」を持つことになったと考えられる。結局彼は、現実的な選択として一つの教派である聖公会に落ち着いた。しかしこれも新旧教の両極端を避ける包括性の中で、東西教会の分裂以前の初代教会の信仰と伝統を継承することを意味する聖公会の「ヴィア・メディア」(Via media)精神にも共感したからではないかと考えられる。したがって彼は、聖公会に所属しながらも聖書改訳や賛美歌編纂などにおいて教派間の協力を続けて行った。そのため結果的に彼は日本におけるエキュメニズムの原型を具現化してゆく生涯であったとも評価出来るだろう。

第三には、松山がグリーン宣教師から教えられた最初の神学が「 sacrament」(聖餐)と「baptism」(洗礼)の要素を特に強調する内容であったからだ。1874年に行われた神戸公会(現在、日本基督教団神戸教会)創立礼拝の時、グリーン宣教師は信条と規則を松山高吉に朗読を担当させたが、その核心内容が「聖餐と洗礼」の意味を解説し、奨励することであった。⁶⁸松山が朗読したと考えられる『公会の主意』の最後の部分には「九、公会の諸々の役は神のたてたもうものなり またバプテスマと晩餐とは公会のたいせつなる礼なればいつまでもまもるべき事」である点を強調し、「バプテスマを受けて公会に入る人に尋ねる事」という別の項目を再び強調している。その後神戸教会の主任牧師になる松山は、当時の説教集である『聖書講義並演説』(1880 - 86)で、聖餐と洗礼を行なう理由を特記したり、聖礼典が行われた時は必ずその人数を併記するなど、その二つの要素に特別な関心を持って

⁶⁵ 洪伊杓、「松山高吉と植村正久ノ関係形成過程とその意味」、『キリスト教史学』第69集、2015年7月、pp. 186-188.

⁶⁶ 1884年から1886年まで、松山が関東地域で説教や講演を行なった場所は下記の通り。；麻布會堂、虎ノ門會堂、麴町會堂、新築教會、明治會堂、日高輪臺町會堂、下谷會堂、朝下谷教會堂、入舟町(フワイソン)監督教會堂(フワイソン氏會堂)、両替町十三番地會堂、日本橋教會堂、両国教會堂、吉町新橋會堂、基町公會、露月町會堂、教寄屋橋會堂、横浜住吉町會堂、中六番町講義、靈南坂會堂、大説教会、連合説教會、清晤会、愛隣会、赤心社懇親会、横浜青年会、横浜禁酒会、東京新宿座、品川口血子町病院、堺町商義社、厚生館、下谷会、神田尊生舎、青山英和學校、愛隣会ノ集り、渡り鳥ノ論、横浜山手フェリス女学校(横浜フィリス学校)など多様な教派と団体で説教を行なっている。(松山高吉、『聖書講義並演説』、参照。)

⁶⁷ 松山高吉、『日記』、1902年2月11日、水。

⁶⁸ 「私の(日本語)教師である関(松山)は、洗礼の性質を説明する奨励をし、そののち彼は信条を読んで、その説明をしました。洗礼ののち(教会員の)約束も同様にしました。(…)聖餐式の執行に先立ち同様の奨めをしました」D. C. Greene's letter to N. G. Clark, April 24, 1874.; 茂義樹、『明治初期神戸伝道と D. C. グリーン』、東京:新教出版社、1986、pp. 161-167. から再引用。

いた。⁶⁹1884年の「洗礼ト聖霊」という説教を見ても「実ニ信ズレバ必ズ『バプテスマ』ヲ受ク若シ信ジテ『バプテスマ』ヲ受バ神之ニ聖霊ヲ賜ハザルナシ故ニ信ジテ『バプテスマ』ヲ受ルモノハ救ハルベシ」⁷⁰と、そのような聖礼典の意味を重視する姿勢を現している。自由主義神学の影響下で洗礼と聖餐の伝統的な価値を見過ごしていた熊本バンド、特に海老名の神学的な姿勢に対立することになり、結局その二つの要素をプロテスタント側で最も忠実に守っている聖公会を選ぶことになったのではないかと考えられる。

最後に、生涯に渡って松山は賛美歌編纂に尽力した点である。音楽的な伝統をも聖公会は礼拝の中で尊重していたため、松山にとっては特別な魅力を感じたと考えられる。このような点以外にも、最初の日本人としての組合教会牧師である松山が、牧師職を捨て、聖公会に転会した理由があるはずである。それは今後の研究課題として残したい。

5. 松山と海老名の関係と彼らの神道理解

新島との格別な関係とリーダーシップなど、多くの面で松山は海老名弾正など熊本バンドにも一定の影響を与えた可能性が高い。その中でも、海老名の独特な神道解釈は、国学者⁷¹であった松山の先駆的な神道思想の影響下で新しく構築されたのではないかと推測できる。

二人の神道解釈について注目する重要である理由は、松山が旺盛に神道関連著述を発表した期間には海老名の神道関連著述がなかったという事実である。しかし、松山が日本組合教会と決別し、同志社も辞任する瞬間から海老名の本格的な神道研究が登場し始める。日本伝道会社社長から松山が退いた直後、海老名が新任社長として就任した1890年には、松山が『六合雑誌』に「尊皇愛国」という論文と「日本の神道」などを連載した。海老名は国学者出身である松山のこの文献を確実に参考にしたはずである。

⁶⁹ 例えば、1884年9月7日に行なった「洗礼ト聖霊」の説教で「キリストニ従ヒ其志ヲ洗礼ヲ以テ神ト人トニ公ニ顯シ又其心ニ聖霊ノ感化ヲ蒙リ品行モ性情モ改ルニ非ザレバ神國ノ子輩ト為ル能ハザル」などのメッセージが終わるところに「晚餐式アリ受洗者アリ」と記している。

⁷⁰ 松山高吉、「洗礼ト聖霊」、『聖書講義並演説』1884年9月7日。

⁷¹ 松山家は歴代儒道家であったが、当時における伝統的文化を伝えるとともに、進歩的文化推進の役割を担っていた。幼少期より明治維新当時の流行思潮であった平田派の復古神道の影響を深く受けて育った。家風に従って国漢の学に就き、やがて平田篤胤の息(養子)、鉄胤に師事する。また 1869年6月には国を出て京都に上り、白川家学館で国史並びに格式などを研究し始めた。1870年には東京に移り、白川資訓神祇大副(神祇官の次官)の邸に寓りながら研究し、1871年には黒川真頼、権田直助から国学を学び、傍ら伊能穎則によって和漢の史伝研究をした。このように25歳まで松山は国学を主体に研鑽し、こうして大和ぶりの人間形成に終始している。現代風にいえば、新政府のエリート官僚として将来を囑望されていた青年であった。実際に、松山が直接師事をした平田篤胤は明治政府の神祇官の設置にあたり神道国教化政策の採用に活躍した。1873(明治6)年6月に松山は東京に招かれて、教部省内儀に与り大教院についての議論に賛同できず神戸に戻った経緯がある。(溝口靖夫、『松山高吉』、西宮:松山高吉記念刊行会、1969、p.47。;林正樹、『聖歌・賛美歌の宣教思想—松山高吉におけるエキュメニズムの萌芽』、大阪、かんよう出版、2013、p.18。)

その直後の1891年からは同志社神学校で松山の神道学及び日本宗教講義が始まった。海老名が神戸教会の主任牧師として赴任した1893年には2年前(1891)から始まった松山の同志社での神道講義が休まず行われていたため、松山の神道理解は海老名に伝授されたと見ることができるだろう。また、海老名が自由主義神学に立脚した独特な神道解釈を始めた時点も、神戸教会に就任した1893年以後であるため、二人の相互関連性及び思想的交流も重要な究明課題である。

1893年、「神道起原」を最後に松山の神道関連論文は影をひそめる。同年に松山は、同志社理事(社員)職を退き、3年後の1896年には同志社教授職も辞任する。このように組合教会及び同志社と距離を置くことになった状況で、海老名は「神戸教会」の牧師として組合教会内部の核心的リーダーシップを発揮することになった。ちょうどこの時から海老名は本格的な神道関連発言を出し始める。その出発点がまさに松山が同志社と公式的に距離を置いた1896年に発表した「日本宗教の趨勢」という論文である。翌年(1897)には『六合雑誌』に「神道の宗教的精神」という論文を載せたが、この論文内容の多くが松山の神道思想と類似する。

その後、海老名は『帝国の新生命』(1902)、『基督教提要』(1910)、「先帝と基督教」、『嘆徳布教資料』(法蔵館編集部編、1912)、『基督教十講』(1915)、『新日本精神』(1935)、「基督教は如何に神道を見るや」(連載)⁷²などを続けて発表し、神道とキリスト教を一致させようとする神学的試みを持続して行く。そして松山が担当した「日本宗教史」の授業と関連づけて、欧米の宗教学理論を同志社で教える時に使ったと考えられる「宗教学」講義録も残っている。⁷³その核心には神道の進化発展による多神教的、迷信的要素から脱皮することで日本固有の「国体」と「敬神」という概念だけを残し、キリスト教の唯一神概念と合致(合一)されることができると考えたのだ。結局このような姿勢は、キリスト教が国家神道および近代天皇制と合一する進路を正当化する根拠になる。

このように松山が日本組合基督教会から離脱する過程で、海老名は新しいリーダーとして急浮上した。同時に海老名は、松山が組合教会に植えた神道思想を自分の国粹主義神学と連結させ、さらに精巧に発展させて行った。松山は組合教会の外側で自分の主な領域だった神道思想が海老名によって自分の意図とは関係なく展開されて行くことを黙々と見守っていただろう。その間、松山は聖書翻訳改正作業と聖公会の賛美歌編纂作業など「聖書及び賛美歌」関連事業に従事した。

⁷² 海老名弾正、「基督教は如何に神道を見るや」『日本基督教新聞』(連載4回)、第2263-66号、1935年6月30日、7月7日、7月14日、7月28日。

⁷³ 海老名弾正、『宗教学』(講義録・筆書、30丁)。;同志社大学人文科学研究所、『海老名弾正資料目録』、2004年、p.11.

したがって、海老名の独特な神道解釈は松山の先駆的な神道思想の影響下で新しく構築されて行った結果であるかも知れない。また、日本組合教会と同志社から松山の存在が消えたという政治的な環境変化とともに、西欧の自由主義神学の積極的受容という過程を経て、海老名の神道解釈はより果敢で急進的に進めて行くことが許された。もちろん、その後、渡瀬、魚木などが受け継いだ海老名の神道解釈は、結局松山のそれと相当な距離を作り上げていった。

6. おわりに

溝口は松山高吉について、「松山は、終始宣教師の宣教精神のよき理解者として、新島の生前にはその協力者であった。(…)しかし、宣教師の理解者というのは決して世に言う文明開化の謳歌を意味するものではない。彼には古い日本人の伝統精神が隠然として生きていた。ここに松山独自の面目が見られる」⁷⁴と評価した。このように松山は「宣教師と熊本バンド」、「キリスト教と伝統思想(神道)」、「組合教会と聖公会」などの境界線上に立っていた。植村正久などとの信頼関係は、聖公会及び一致教会など他教派との協力関係を追求するものではなかったか。しかしそのため松山は日本組合教会の開拓者にもかかわらず、その場と決別した。海老名弾正を中心とした熊本バンドの新神学と反宣教師的な政策と対立したからである。

その後、日本組合教会と同志社では松山の存在が忘却されたまま放置されて来た。そのため「朝日新聞」は、日本キリスト教界における大きな貢献にもかかわらず、広く知られていない彼の生涯について「野に咲いた花」⁷⁵と表現した。松山が死んだ直後に『同志社校友同窓会報』に報道されたプロフィールにも組合教会から聖公会に移って行った事実さえ抜け落ち、⁷⁶組合教会での文献には、聖書翻訳者としての彼の貢献に関する記録も不十分であると指摘している。⁷⁷このように松山が生存していた時は勿論、戦後の日本組合教史及び思想史

⁷⁴ 溝口靖夫、『松山高吉』、p.103.

⁷⁵ 「彼の名は、新島襄、植村正久、内村鑑三その他もろもろの著名人に比べ一般的ではない。野に咲いた花ともいふべきか。神道を奉ずる国学者からクリスチャンへ、この変った経歴をもつ彼の残した仕事は、わが国初めての聖書の和訳、讃美歌の作詞、編集のほかには神戸、平安両教会の初代牧師であり、新島襄を助けた同志社の創業をはじめ神戸女学院、平安女学院など関西のミッションの教育つまり宗教文学、伝道、教育に大きな足跡をとどめている。」(「松山高吉、野に咲いたパウロ、讃美歌作詞や聖書名訳」、『朝日新聞』、1971年10月30日、p.15.)

⁷⁶ 河野仁昭、『追悼集VI-同志社人物誌(昭和10年-12年)』、同志社社史資料室、1993、p.6.

⁷⁷ 「聖書邦訳上に於ける松山高吉翁の功績」という内容では「外国伝道会社の年報、宣教師伝記、日基、メソヂスト派の諸文献を除いては組合教会派の文献には余り詳しい記録が無かった」と記されている。(河野仁昭、『追悼集VI-同志社人物誌(昭和10年-12年)』、p.7.)

研究においても松山は疎外されていた。⁷⁸それにも関わらず、松山が移籍した日本聖公会が彼の功績を記念し研究することもなかった。すなわち、境界線上に立っていた松山に対する評価⁷⁹は、これまで正当だったとは考えられない。したがって、明治キリスト教の代表者である海老名との比較研究は、隠されていた人物の再発見と再評価を可能にするだろう。

結論として再び強調すると、松山の退陣と海老名の浮上は、以後の日本組合基督教会の宗教思想、特に神道とキリスト教を接合させた独特の理解を分析するために重要な要素であることだ。海老名の独特の神道解釈も神戸教会の就任以後から本格的に登場することは、それ以前まで組合教会内で神道解釈の主導権を持っていた松山の退陣と不在の中で、海老名が組合教会の新しい神道解釈家として登場したことを意味するからだ。実際に、松山が日本組合教会を離れ同志社の職を辞任する瞬間から、海老名の神道関連著述が本格的に登場する。それは決して偶然な事ではない。海老名の神道解釈は、どんどんと自由な国粹的解釈にはまっけてゆき、以後の弟子である渡瀬常吉などの急進的神道解釈にまで広がって行く。そのような点から、宣教師や植村などと交流して均衡を合わせようとした松山の神道解釈とは距離が置くこととなる。こうして、日本組合教会での松山の退陣と不在は海老名の神道解釈に類似と相違の両方に少なくない影響を及ぼしたと考えられる。それゆえ、松山の日本組合基督教からの離脱は海老名弾正の思想を理解するために重要な一つの地点になる。

⁷⁸ 「海老名など熊本バンドが急浮上しながら発生した組合教会の内部紛争によって、松山は聖公会の堅信礼(信仰告白)を受け、組合教会から離れ、引退後、彼は1935(昭和10)年90歳の長寿を保って、京都の自宅で昇天した。明治、大正、昭和と三代にわたって多くの仕事をなしてきた老伝道者にふさわしく、晩年は静かな生活と心境であった。1927年、松山が日本聖公会に転会したので、葬儀は聖三一大教会(聖アグネス教会)で行われたが、同志社理事會が同志社への彼の功績を認め、現在、京都・若王子の「同志社創立者墓地」(ウイリアムズ主教の墓地のすぐ下の区画)で新島襄らと共に葬られている。」(「松山高吉、野に咲いたパウロ、讚美歌作詞や聖書名訳」参照。)

⁷⁹ 塩野和夫は、溝口の松山研究を魚木忠一の「宮川・海老名・小崎」研究と比較しながらその独特な意義を強調している。すなわち、魚木は日本組合教会の教会史的・思想的な中心人物研究に没頭し、日本古来の宗教研究が重んじられその視座や強調点も日本人・松山がキリスト教に改宗したことにある反面、溝口は組合教会史研究では傍流に位置し、宣教師と日本人教師あるいは組合教会と日本聖公会の境界線に生きた人物である松山に注目したという点である。その境界線は宗教と宗教、すなわち、神道とキリスト教の境界線にまで至り、最後まで彼の神道的背景や素養に注目している。(塩野和夫、『日本組合基督教会史研究序説』、新教出版社、1995、pp.73-74, p.85.)

参考資料

松山高吉と海老名弾正の生涯比較

年度	松山高吉	海老名弾正
1846	出生(新潟県・越後糸魚川)	
1856		出生(福岡)
1869	国を出て京都に上る。(6月)白川家学館で国史並びに格式などを研究(7月)東京に移り、白川資訓神祇大副の邸に寓る(11月)	1865年秋から藩校・伝習館で漢字を学び始める。
1874	受洗、摂津第一公会設立(4月19日) 新約聖書翻訳のため横浜に移転(6月11日)	
1875	新約聖書翻訳に没頭	聖書勉強会で新生(回心)を体験、「神を主君、自分を臣下」と捉え、忠僕になろうと決心
1878		学業を中断、安中伝道に没頭(2月)新島襄を迎えて洗礼式を挙行、安中教会創立(3月30日)
	最初の日本基督教信徒大親睦會(1878. 7. 15、東京築地新栄橋教会)で松山と海老名が始めて出会う。	
1879	新約聖書翻訳の完了(12月2日)	同志社英学校卒業(6月) 第一回卒業生、15名全員が熊本洋学校出身。安中教会伝道師に就任(10月) 新島と松山を迎えて按手を受け牧師になる(12月)
1880	神戸公会に牧師として就任(6月4日)	安中時代
1883	同志社社員(理事)を受諾(1893年まで) 同志社との公式的な最初の関係を結び。	安中時代
	日本基督教徒大親睦会(教築地新栄教会、5月)で二人が再び出会う	
1886	一致・組合両教会共同の『新撰賛美歌』委員となる(春)	前橋教会創立(7月)東京に移転、本郷湯島に「博愛館」(本郷教会の前身)を開設(10月)
1887	旧約聖書翻訳完了(10月末) 京都平安教会の牧師に就任(12月) 同志社病院と京都看病婦学校の創設を主導	家庭的事情で、熊本に移転する事を決定(6月)
1888	聖書翻訳完成祝賀式(東京築地新栄教会、2月3日) 『新撰賛美歌』完成出版(5月)神戸女学院囑託、国語担当(1889年まで)	熊本英学校設立、校長に就任(4月)

1889	同志社に講師として倫理を担当、同志社常職員 (常務理事)、常置議長に選任(6月7日)	熊本女学校設立、校長に就任(11月)
1890	同志社教会の仮牧師になる(2月3日) 日本基督伝道会社社長に選挙される (4月2日) 日本基督伝道会社社長を辞任し、平安教会の名誉 牧師になる(9月)	組合教会本部の方針に基づき、熊本の諸事業を蔵 原にゆずり、松山高吉の後任者として組合教会の 日本基督伝道会社社長となり、京都に移転 (10 月)
	坦庵居士という筆名で、「 尊皇愛国 」、『六合雑 誌』(第101号)に寄稿。連載物、「 日本の神 道 」、『六合雑誌』(第115 - 125号)を寄稿。	
1891	平安教会辞任(9月1日) 同志社に移り、神学校で神道及び日本宗教史、 政法学校で日本政治史を、普通学校(中学)で国 史、国文を教授。 (9月から)	日本基督伝道会社社長時代(京都にて)
	同志社神学校での 講義録(教科書) 、『 神道 』、 『 日本宗教講義 』(筆で執筆、孫・松山龍二所蔵)	
1892	同志社資産管理委員に就任(4月)	伝道会社社長として北海道開拓伝道(8月)
1893	同志社社員(理事)を辞任 (6月)	宣教師からの経済的・神学的独立を主張し、伝道 会社社長選挙で落選(9月)、 神戸教会牧師に就 任 (9月、97年まで5年間)、この神戸教会の次期に ほぼ海老名の自由主義神学に基づく信仰が確立さ れる。
	「 神道起原 」、『同志社文学』(第77 - 78号)寄 稿。	
1895		奈良で開かれた組合教会教役者大会で、海老名ら 中心となり「 奈良宣言 」を出す(10月)
1896	同志社教師職を辞す (6月) 平安女学院に聘せられ、倫理・国史を教授(6月) 同志社教会より洛陽教会に転籍(7月12日)	「 日本宗教の趨勢 」、『六合雑誌』、1896. 11、 12、1897. 1、3、4. 寄稿。
1897	再び同志社社員承諾(1月20日)平安女学院講堂に	再び東京の本郷教会牧師に就任(5月)
	においてマキム監督より堅信礼按手式を受け、 組合 教会から聖公会へ転ずる (1月29日)	「 神道の宗教的精神 」、『六合雑誌』(198号)を 寄稿。

1898	同志社資産管理委員を辞す(3月) 同志社社員総辞職となり同職を辞任(12月28日)	
1900		『新人』創刊、主筆になる(7月)
1901	聖公会の『古今聖歌集』完成(8月)	植村正久とキリスト論論争 (9月から1902年7月まで)
1902		『帝国の新生命』(警醒社、1902)発刊
1906	同志社教職辞任(4月) 同志社社長代理(11月、翌年(1907)1月に原田総長 就任するまで臨時的に)	
1909		『新女界』創刊、主幹になる(4月)
1910	英国聖書会社より聖書改訳委員を委嘱され承諾す る(1月20日) 新約聖書改訳委員会業務に着手(4月13日)	『基督教提要』(神戸:基督教世界社、1910) 発刊
1911	同志社理事満期退任(3月末)	
1912		「先帝と基督教」、『明治天皇嘆徳布教資料』 (法蔵館編集部編、法蔵館、1912)寄稿
1915		『基督教十講』(警醒社書店、1915)で神道につ いて論述
1916		『選民の宗教』、(新人社、1916)発刊
1917	新約聖書改訳完了(2月24日)	
1919	英国聖書会社名誉会員に推される(3月)	
1920		第8代同志社総長に就任、京都に移転(4月)
1935	死去(90歳、1月4日)	「基督教は如何に神道をみるや」、『日本基督教 新聞』に4回連載。 『新日本精神』(近江兄弟社出版部、1935)発刊
1937		死去(81歳、5月22日)

(ホン・イピョ 明治学院大学キリスト教研究所協力研究員)